

冒険よりもヒロインとシたい!

ゲームの裏側では
シれかしらたらこんな
シもあつたかも?

強気な性格の巨乳魔法使い。

勇者にモブにモンスターに
ハメてハメられて

基本CG:7枚

プレイ内容

- ・宿屋で全力騎乗位
- ・18禁版はふはふ
- ・やりまくり正常位
- ・まほうのどきで発情フェラ
- ・エロスライムの斬撃
- ・名家の御曹司と性談合
- ・パニーのセックスショー

もくじ

◆◆◆ダンジョン帰りの宿屋で全力騎乗位◆◆◆【和姦】



難関ダンジョンをクリアし、
いろいろと昂ぶった気分のまま、
近くの宿屋に立ち寄り泊まることに。
冒険の疲れはヒロインと共に
ベッドで癒そう！
でも思った以上にヒートアップして
翌朝はいつもヘトヘト…？

◆◆◆18禁はふはふ◆◆◆【和姦】

出会った頃は勝ち気で厳肅で
ガードの固かったヒロイン。
だが今では、滅多にないが、
上機嫌だとこんなパフパフも
してくれる！
見よ！これが18禁版はふはふだ！！



◆◆◆やりまくり正常位◆◆◆【和姦】



妖艶な雰囲気が漂う二人きりの部屋……
あふないビスチェを身にまとうヒロイン
キングサイズのセクシーなベッド……
全てが用意されたシチュエーションで
ヒロインととことん中出しエッチ！

◆◆◆まほうのビキニで発情フェラ◆◆◆【和姦】



あくまで防具として装備したはいいものの、正直目のやり場に困るパーティー。とうとう堪えられなくなり、街の人目につかない裏路地に引き込んでフェラさせる。ヒロインも相当むらむらしていたようで、わりと進んでしゃぶりつき、美味しそうに精液をごっくんしてくれました。

◆◆◆エロスライムの襲撃◆◆◆【陵辱色】

謎のエロスライムに返り討ちにあい、ヒロイン以外のパーティーはあっという間に棺桶送り。ヒロインは魔力も尽き抵抗できないままスライムの慰み者に……。



◆◆◆名家の御曹司と性談合◆◆◆



【陵辱色】ヒロインが名家の娘として村でくすぶっていた頃のお話。望まない相手をフィアンセにさせられ性行為を強要される。

◆◆◆とれたたてパニーちゃんのセックスショー◆◆◆



【陵辱色】

カジノでボロ負けし、身ぐるみを剥がされ働いて返すことに。
舞台上踊るだけと聞いていたが
屈強な男が表れ公開セックスショーを
する流れになってしまう。
装備を担保に取られているため
逃げるわけにもいかず
ヒロインは泣く泣く観客の前で
犯される。

冒険の書 P:1

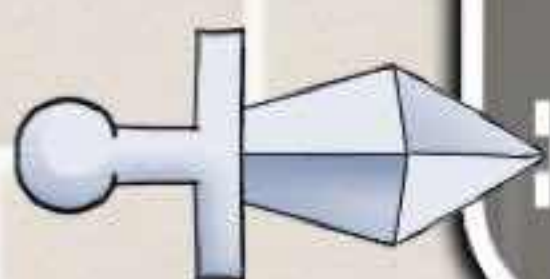
1:エイト Lv 45 パルミド 36:10

2:使用していません

3:使用していません

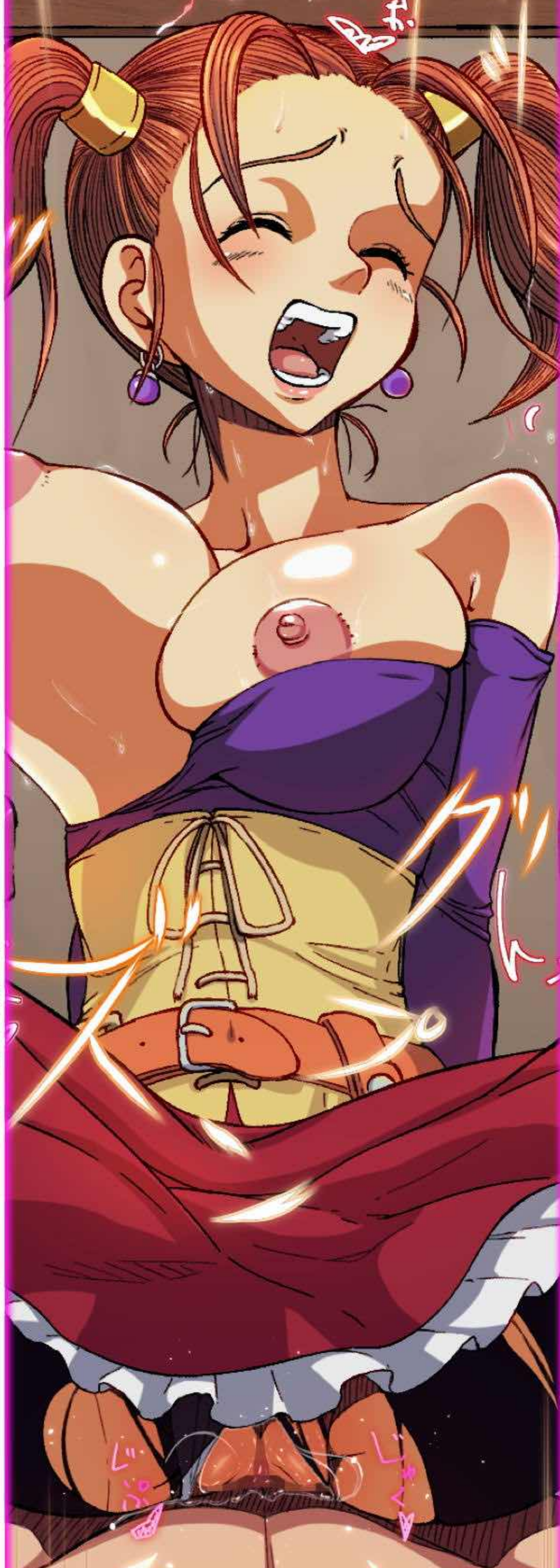
4:使用していません

5:使用していません



x:?????

「んああっ……気持ちいいいい……うああっ♡いいのぉお……
ふああああああん……そこおおおっいいのぉお♡」
難関ダンジョンをクリアした達成感からか今日は特に乱れていた。
「いくうううううううううう♡……ごめん私またイって……ふあああっ♡」



「……でも……んっ……あなたに……もおっ……
たくさん気持ちよくイって欲しいからあん♡……今日は頑張っちゃうね♡」
ここは難関ダンジョン近くの宿屋で、他に泊まっている客も居なかったため、
人目を気にせず開放的にエッチを楽しめた。

「んああああっ……ああああっ♥んっんっん……ふああああああああっ♥」
気持ちよくさせようと、懸命に腰を振り続けていた。
彼女の魅力的な身体とそれから得られる物理的刺激も十分にそそるが、
今まで共に旅をし培ってきた信頼関係と自分への思いやりが何よりの興奮材料だ。

「騎乗位でえええっ……んああああっああああっ♥……腰一気に落とすっ……
頭のとっぺんに響くうううっ……もっとなアナタをっ……
気持ちよくさせたいのにいいっ♥」
「射精を促そうとするが自分もまたイキそうになっ……
んっっ……イクの？……いいよおっ……いつでもっ……
……き……わらひも……も、もおおおっ……イっ……
そして最高に気持ちいい射精を、彼女の奥深くで果たした。」

気持ちいい？

いっす？
んっんっ

「いっぱい出してえええええーっっっっ♥」
大陰唇が竿の根本にぴったり密着し、亀頭が子宮口とキスした状態で力強く射精した。
「イっっちゃうっうっうっうっうっうっうっうっうんんんんっっ♥」
外のモンスターがざわつくほど大きく甲高い声を上げながら激しくイっっていた。

射精後もしばらくは繋がったままで余韻に浸った。
「ねえ、気づいてた？私、エッチした後魔力が回復してるみたい」
心地よい気だるさが抜けられないままの声でつぶやいた。
それは、後に魔力回復を口実にエッチの回数を増やそうとする
伏線だったとはこの時のアナタは思いもしなかった。

出てくるっ！
たくひゃん
れるおま...

「ばふばふ〜つて……うふふ、ずっとこうして欲しかったって顔してる……ふふ……言わなくてもずっと旅してきた仲間なんだからそれくらいわかるわよ」
「出会った頃より露骨な視線が減ったからもう私のナイスバディには慣れてきたのかと思ったけど……内心はずっとこのおっぱい狙ってたの？」
「……まあ何でもいいわよね」

たれ持ちっ？

「私もたまにはサービスしてあげる♥」
「……アナタと出会えなかったら私はきつと旅の目的を果たせずに故郷に泣く泣く帰るハメになつてただろうしね……」
「……本当に今でも感謝してるの」

「気持ちいい？こんな感じで……最後までいけそう？」
自信家の彼女でも経験のないことは不安らしく、このままで射精させれるか不安の色を隠せない様子。だから、言葉で直球で伝えた。

[illegible]

「すーっ……出てるうっ……! うふふ……んっ♡」
彼女は戸惑いつつも全身で射精を受け止めた。
自慢の顔や髪、そしてそのたわわな乳房を
欲望の白濁液で汚されても嫌な顔一つもみせなかった。

むしろ、悦んでいるように見えた。
「うふふすごい量♡……見てるだけで元気な赤ちゃん
産めそうな精液だなんて思っちゃう♡」



「気持ち良かったんでしょ？……ま……溜め込むのも体に毒だろうし、たまにはこういうのも……いいかも……ね……どう思う？」
「ふふ……答えなくていいわ……とりあえず……べとべと……ようかい……」
彼女はお風呂に入って身体をきれいにしたいようだった。

スツギリ
した、？

ハッ……

本中

「……近くにお風呂が入れる宿ってあったかしら……」
その後、彼女と一線を越えるのに、そう時間はかからなかった。

ん……

長い旅路の束の間の休息。その町で、あぶないビスチエを買って、
エッチ目的で宿に泊まり、元から一つだったかのようにベッドの上で絡み合った。
「ああああっ♥ああああっ♥何回突かれても気持ちいいいいいい♥」
「もうやりすぎてっ……頭んなかあっ……ぐちゃぐちゃあああっ……あああっ♥」
「泊のつもりがもう二泊もしている。」

「あああ……ああああっ♥……もうイっちゃっうっ
……一緒にっ……もっ……と深くまで愛してながらっ
……一緒にイってええええええ♥」
「飽きもせず、狂ったようにやり続け、
今だけはその他のこと全てを忘れ、
煩惱の世界に入り浸った。」

「んおおおおっおおおおっおおおおっおおおおっおおおおっ
 これが最後と決めて渾身の中出しを決めた。
 彼女の身体は一際悦び膣を激しく収縮させた。
 彼女自身も最後というのが伝わったようで、
 一際大きく嬌声を上げて、全力でイっていた。」



「んあああっっ……あっっ♡
……あっ……ん……♡」
またこれから始まる旅路を
二人で思いながら、
しばらくその幸せな余韻に浸った。

「何回イったんだろう……凄く疲れて苦しいくらいだけど……イク度に幸せになる」
「アナタにイカされる度に身体が一度バラバラに壊されて生まれ変わった気分になる」
……もう元の私がどんなふうだったか分からないくらい……
今の私はアナタ色に染まっちゃってる」

「本当はもっと抱いて欲しいけど……」
「そろそろ旅の続きをしなくちゃね……」
「……これからよろしくね……大好きだよ」





「なんなのこのスライム……他のとなんか違……っちよ……どこ触……きゃああた！
振りほどこうとしても見た目以上に力が強く、抵抗むなしく彼女は又スライムに弄ばれた。
このエロススライム……いい加減につ……くっ！いやっ……んんっ♡」
真っ先に餌食になったのが彼女のその魅惑の胸だった。
次いでスカーートの内側、やがて身体中をくまなく弄られた。

「冗談でしょっ……
こんな道端の雑魚敵につ……んっ♡」
最弱の魔法で倒せる筈だった雑魚に
返り討ちにされ、挙げ句の果て身体を
弄ばれ性的に楽しめたと恥ずかしさで
彼女は悔しかった。彼女は悔しかった。

「うそっうそっうそっうそっ！いやあああっ！……んぐうっ♡」
「ついに触手が彼女の奥深くにまで這い寄った。
「後で覚えてなさいよっ……くううんっ♡……ちよっ♡……う、動かないでえええっ♡」
触手はただ欲望のままに弄るだけでなく彼女の快楽を刺激するような巧みな動きをした。」

「いやっ……んああああっ♡
声出ちゃうううっ♡嫌なのにつ……ぐっ……くっつう……」
声を押し殺し快楽にだけは意地でも抵抗しようとしたが、終りが見えない執拗な責めについに屈してしまった。
「ふあああああっっあああああ♡
もううらめえええええっっ♡」

「んあああああああっっっ♥なんか出てるうううううううう♥」
スライムは満足げに謎の液体を噴出し、
彼女の内も外もマゾキングするかのうようにひっかけていく。
「ああ……ああ……うううう……」
一通りやり終え満足したスライムは脱力しきった彼女を開放し、高原の彼方へ去っていった。

何が出してる

「……くう……あのスライム……」
覚えておきなさいよ」
その後、近隣で女性に性的ないたずらをする
スライムが噂になったが、しばらくした後
ある魔法使いが特大のメラゾーマで
大地ごと焼き払って無事？解決したそうなの。

「やっとキミを口説き落とせたよ……
そうそう、そうやって大人しくしていれば
君の家は安泰なんだからさ」
「軽口叩いてる暇があるならもっと
腰振りなさいよ……粗末すぎて
ちつとも気持ちよくないわ」

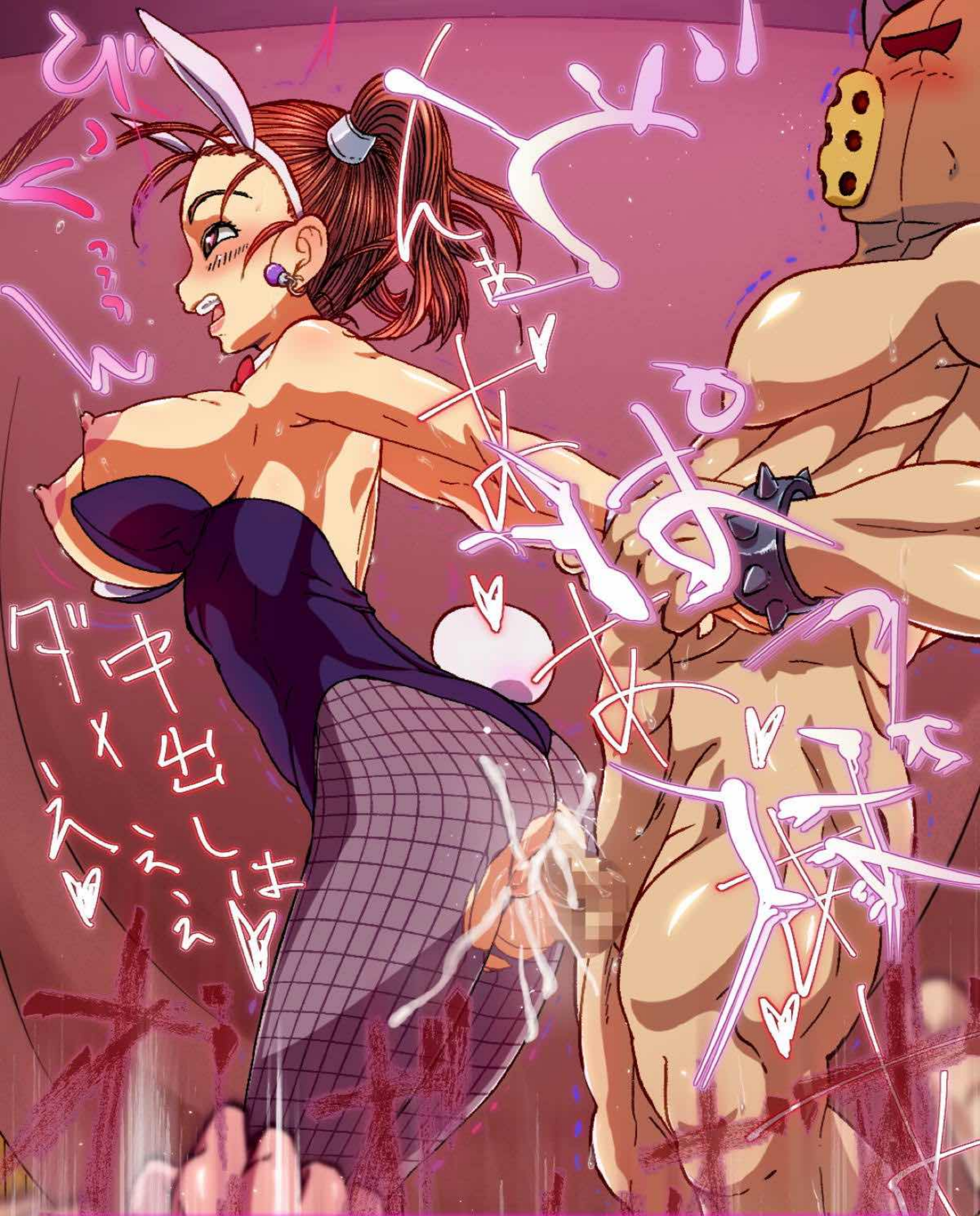
「な、なんだとおおお！優しくしていたら
つけあがってえええ……だったら
お望みどおり激しくしてやるよ！」
「んっ……くうっっっ♡」
「どうしたんだあ？言っつ割には
気持ちよさそうな声が聞こえてきたぞ？」
「……ぐっ」
「ほら出すぞ、君はボクの子を孕む
ファイアンセなんだから、
当然中出しだあああ！」

「あがあああああ！
きききき、気持ちいい！
ここまで来るのが長かった！
最高の気分だあああ！」
豚のような嗚咽をあげて御曹司は射精した。
「……うつつ………クソ野郎………」

「言葉遣いが汚いなあ………まあ上品な
ボクと一緒に居ればそのうち
矯正されていくさ」
念願の女をやれて、御曹司はご機嫌の様子。
「ベッドに行こう………ボクが優しく
エスコートしてあげるよ、ハハハ」
この後もしばらく彼女の苦悶は続く。



観客席から怒号のような歓声が飛び交い
舞台は過去に見ない盛況ぶりだった。
それもそのはず、今舞台上で踊っているバニーは新顔で
とびきり可愛くてナイスボディの持ち主だったからだ。
本気で嫌そうにしながらも快楽に抗えず声を出してしまう姿に
観客の興奮もうなぎのぼり。
揺れる胸や悶絶する表情、乱れる髪などバニーの痴態を
血走った目で凝視する観客。
羞恥心と快楽に吞まれ、バニー自身も理性がとろけ始めてきた。
行為は時間が経つほどに苛烈に、そしてその終わりはバニーが
絶頂を迎える時に訪れた。



舞台の熱が最高潮に達した。バニーはドクドクと射精をされた瞬間に、この場に居る男全員に中出しをされたのかと錯覚した。それほど会場を包む一体感は凄まじいものだった。熱すぎる体温と強すぎるオルガズムでバニーの理性は崩壊し、それは楽しそうにイキ狂ってその場の雰囲気やに呑まれていた。傍らでムードのあるサックス演奏が始まり舞台は一旦の落ち着きを取り戻し始めていた。だが夜は長く、舞台はまだ開演したばかり。バニーの瞳は何を思ふのか、ギラギラと妖艶に揺らめいていた。



